禅房十事　香炉

画：正親里紗

館　隆志

今回は「禅房十事」の中から、七番目に取り上げられている「香炉」を紹介します。「こうろ」と読んでいます。香炉は焼香に際して用いる道具で、炭や火種を入れて香を焚いたり、あるいは線香を立てる器のことです。

この焼香のことを別に「拈香（ねんこう）」とも言います。「拈」は「拈（ひね）る」とも読めるため、焼香の時に香木をつまんで「ひねる」と紹介している本もあるのですが、この場合の「拈」は「拈（つま）む」の意味で、香木を手にとる行為が「拈香」です。

寺院の法要を行う建造物の中央には大きな香炉が置かれています。お寺の法要では、あらゆる場面で焼香をします。香を焚いて仏さまに供養するのです。焼香が如何に仏教で大事なものであるか、前回の「香合」の際にお話しいたしました。朝や夜のお勤め、どんな法要でも必ず焼香します。しかも、それだけではありません。坐禅修行に際しても必要なのです。

鎌倉時代の修行規則を記した書物があります。鎌倉建長寺開山である蘭渓道隆（らんけいどうりゅう）禅師の

『弁道清規』です。この中の冒頭の一文を抜粋してみましょう。

ややもすると、自らに迷ってあたふたし、物を追い求めて奔走してしまう。だからこそ、四次の香を焼いて、弁道の基準とする。寅（午前三時頃）に起きて偈を唱え、僧堂の単を下りて顔を洗い、衣を着て香を焼いて、仏前に礼拝する。これは業障を懺悔するためである。その後に、被位（坐禅をする自席）に就いて精神を奮い立たせ〔て坐禅す〕る。ほのかに明るくなったら、応量器を展げて粥を食べ、粥を食べ終わったら茶を飲む。

まず、朝起きて坐禅する前に仏さまの前で焼香すると書かれていますから、仏さまに対する一日の最初の行為が焼香であることになります。仏さまへの朝のご挨拶といったところでしょうか。また、「四次」とあるのは、「四時坐禅」という禅の修行道場における毎日四回の坐禅のことです。この坐禅の際に焼香するというのです。

鎌倉時代、一度の坐禅の長さはどのくらいの時間だったのでしょうか。現在は、坐禅の時間の単位を「一炷」（臨済宗ではイッシュ、曹洞宗ではイッチュウ）と言い、線香一本の時間として、四〇分から一時間ほどだと理解されています。「二炷」坐る場合は、間に「経行」という歩行運動をして足をほぐします。曹洞宗では一度の坐禅の時間は「二炷」を基本としていますが、臨済宗ではこれよりも長い時間坐ることが多いようです。ただし、いつから坐禅の時間の単位が「一炷」であったのかはよく分かりません。というのも、中国の南宋時代には線香がありませんし、鎌倉時代にもなかったからです。

さきほどの『弁道清規』によれば、起きてから洗顔・着衣・焼香・礼拝をし、それから坐禅とあるので、三時三〇分頃から明るくなるまで坐禅することになります。夜明けは夏であれば午前五時から五時三〇分くらいと仮定すると、一時間半から二時間くらいの坐禅ということになります。そして、坐禅の開始に際して香を焼いていたことは上述の通りです。仏さまの供養として焼香するのみな

らず、焼香は坐禅の開始の印としても使用されており、禅宗にとって、とても大切なものなのです。

香炉には幾つかの種類があるのですが、変わった形のものを紹介します。古い形のものとして蛸足の香炉があります。本当にタコの足のようにたくさんの足がある香炉です。古い臨済宗のお寺で見ることができます。また、鼎型の香炉というのもあります。これはこの「鼎」の文字のような形をしている香炉です。多くのお寺にありますので、是非、探してみてください。

それ以外に、柄香炉（手香炉）というものがあります。古くから使われている香炉で、手で持ち歩けるようになっています。小さな香炉に柄が付いており、移動しながらでも使えます。

禅宗では、香炉に昔からいろいろとこだわりがあるようで、室町幕府の帰依を受けた春屋妙葩禅師の語録には、「龍蓋香炉」「青磁獅子香炉」「白沢香炉」など、さまざまな形の香炉が登場します。白沢は中国の伝説の動物です。龍や獅子など、素敵なデザインの香炉を想像できますね。

前回の「香合」と、今回の「香炉」は、焼香するための道具として二つ合わせて禅寺に必要なものです。香合と香炉は、仏菩薩さまの供養のために必ず使う道具でした。そして、坐禅の合図としても用いられていました。

焼香は、インドより二五〇〇年以上も昔のお釈迦さまの時代から伝えられ、我々はその伝統を受け継いでいます。その焼香に必要な香炉は、仏さまを供養する心を常に持ち続けることの大切さを今に伝えるとともに、坐禅修行に欠かせない道具となっているのです。

館 隆志（たち りゅうし）
一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭渓道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。